

# 『花鳥余情』が説く『源氏物語』のことばと心

—「漢」との関わりにおいて—

河 野 貴美子

## はじめに

『源氏物語』は、和文によって書かれた日本の古典文学を代表する作品として、現代に至るまで読み継がれ、学び継がれてきた。その『源氏物語』の日本文学史上における絶大な存在感と影響力は、平安後期以降次々と生み出された注釈書の多さに端的に表れている。

中世の『源氏物語』古注釈は、既出の注解の上に新たな説解を重ね加え、だんだんとボリュームを増していき、やがて四辻善成の『河海抄』（一三六二年頃成立）というピークに至る。博引旁証たること群を抜く『河海抄』の注釈方針は、『源氏物語』の和語、和文に対して、しばしば関連する漢語、漢文を引き並べ、また、『源氏物語』の典拠と考えられる故事や有職故実に関わる「和漢の先蹤」を列挙することを一特徴とする<sup>(1)</sup>。

そして、その『河海抄』を詳細に検証しつつ編まれた一条兼良撰『花鳥余情』（一四七二年成立）は、『河海抄』とともに中世「源

氏」学の双壁ともいえるものである<sup>(2)</sup>。『花鳥余情』においては、『河海抄』に比べて漢字や漢語、漢文を用いた注釈は減少し、『源氏物語』の本文に「和漢」文の交錯のさまを見出していくことに対しては一見関心が薄れたようである。しかし『花鳥余情』もまた、数は決して多くないものの、従来の注釈が指摘することのなかった漢文や漢籍との関係を、また新たに「発見」、提示している。しかもそこに、宋代以降に成立した新資料がしばしば用いられていることは、十五世紀という時代と、一条兼良という人物にとつての学問のありようを示すものとして注目される。

小稿では、『花鳥余情』が主として「漢」との関わりを指摘しつつ注解を施す箇所を取りあげ、その注釈と学問の方法について確認検討するとともに、兼良が説く『源氏物語』のことばと心の魅力と意義について考察していきたい。

一、一条兼良の『源氏物語』注釈——『花鳥余情』撰述の目的

まず、一条兼良という人物、そして『花鳥余情』撰述の目的について要点をあげる。

一条兼良（一四〇二—八二）は、有職や歌学をはじめ幅広い学識を有した公卿で、『花鳥余情』をはじめとする『源氏物語』の注釈書以外にも、『伊勢物語愚見抄』や『日本書紀纂疏』等の日本古典籍の注釈書に加え、『四書童子訓』といった中国古典籍の注釈書もあり、さらには『権談治要』や『東斎随筆』等、多岐にわたる著作を残した人物である。

さて、兼良は、『花鳥余情』序文で、その撰述の目的について次のように明言している。すなわち、「我国の至宝」たる『源氏物語』の注釈として、『河海抄』の達成を高く評価したうえで、その余を拾い、過ちを改める、ということである。<sup>③</sup>

……我國の至宝は源氏の物語にすぎたるはなかるべし。是によりて世々のもてあそび物となりて花鳥のなさをあらはし家々の註釈まちまちにして雪蛩の功をつむといへどもなにがしのおとこの河海抄はいにしへいまをかんがへてふかきあさをわかつて。もとも折中のむねにかなひて指南の道をえたり。しかはあれど筆の海にすなとりてあみをもれたる魚をしり詞の林にまぶし、てくいぜをまもる兎にあへり。のこれるをひろひあやまちをあらたむるは先達のしわざにそむかざれば後生のともがらなんぞしたがはざらむや。つめに愚眼のお

よぶ所を筆舌にのべて花鳥余情と名づくるどころしかなり。

（『花鳥余情』序<sup>④</sup>）

それでは、漢籍や、漢語、漢詩、漢文との関係において、『花鳥余情』はいかなる注解を展開するのか。はじめにも述べたように、『花鳥余情』においては、全体として漢籍を用いた注釈は少なく、また例えば『源氏物語』の内容が漢籍所載の故事、記事と関係する箇所においても、「王昭君の胡国の王に嫁せし事はない、もある事なれば事あたらしくするすに及ず」（第八・須磨）、「今案孔子のたうれといふ事はむかしより世のことわざにいひつたへたり……くじのたうれたる本文たづぬるに及ばざるべし」（第十三・胡蝶）等と述べ、漢籍・漢文に対する関心は『河海抄』に比して希薄に感じられる。

しかし、『花鳥余情』が、「わざわざ今繰り返して原典を取りあげるまでもない」と述べるのは、そうした故事や記事が『源氏物語』本文の背景に存することについては既に『河海抄』をはじめとする先行の注釈書が指摘しているからであり、先行の注釈書が指摘する漢籍との関係に対して異論がある場合には、『花鳥余情』は自説を明確に述べる。

また『花鳥余情』は、『河海抄』をはじめそれまでの注釈書が指摘することのなかった、「漢」に関わる新たな「発見」については、多くの場合原文を引用しつつ、新たな「読み」の可能性を提示していく。そしてそうした先行の注釈書の検証をふまえた「厳選」された注解だからこそ、『花鳥余情』における漢語、漢文、漢籍の引用は、そこに果たしてどのような意義が見出されている

のか、いま改めて考察してみる必要があると思われる。

なお、『花鳥余情』には、左にあげるように、物語の書きざま、作りざまを評価するコメントがみえる。つとに指摘されているとおり、創作された文章に対する鑑賞的態度が示されることも、作物語の注釈がみせる特徴といえる。

あくるもしらでとおほしいづるになをあさまつりごとはをこたり給ぬべかめり

春宵苦短日高起と長恨歌にかき玉すだれあくるもしらでと伊勢がよめるも唐の玄宗の楊貴妃を寵し給し時の事也。今のきりつばの御門は更衣にはなれおほしまして御歎きのあまりに万機のまつりごとをも打すてたまふやうなれば君王不早朝事はおなじさまなればなをあさまつり事はおこたり給ぬべかめりとかけり。かやうのかきさま心詞すぐれておほえ侍る也。

〔花鳥余情 第一・桐壺〕

あき人の中にてだにこそふることき、はやす人はべりければわなんまことにねをひきしづむる人

文集の琵琶行は白楽天がされて江州の司馬になれる時の事也。源氏も又須磨の浦にこもり給へるおりなれば尤も便あり……(略)……物がたりのつくりざま面白くかきなしたるべし。

〔花鳥余情 第八・明石〕

ただ、ここで合わせて注意しておきたいのは、右にあげた『源氏物語』の二箇所がともに「長恨歌」と「琵琶行」という白居易の作品をふまえて本文が綴られている部分であり、『花鳥余情』はそれらがそれぞれ白居易の詩文に基づく表現であることを指摘

しつつ、『源氏物語』におけるアレンジの妙をほめていることである。そしてこのように、漢詩文に由来し、「漢」の世界と響き合いつつも、新たな和文表現を再構築していく『源氏物語』の「心」と「詞」に対する『花鳥余情』の注目は、他の箇所にも見出すことができる。

それでは以下、『花鳥余情』が、「漢」との関わりの中で注解を施す箇所を通して、『源氏物語』のことばと心がいかに追究されているのかをみていきたい。

## 二、一条兼良の方法 1——漢語と和語の義の追究

まず、『花鳥余情』において、一語の義を漢語(漢字)との関係から追究、考察していく例を見る。「箒木」巻の左馬頭の体験談で、女のもとを訪れた男が笛を吹き鳴らし、「影もよしなどつつしりうたふ」というところの「つつしる」という語の注解である。かげもよしなどつつしりうたふ

……つつしるは嘸也。文選大人賦云嘸瓊華注、嘸は食也。文章を口にてなす事をいふ。こ、のつつしりうたふも口にてうたふなればその心たがはぬなり。

〔花鳥余情 第二・箒木〕

『河海抄』をはじめ、それ以前の古注釈では、この「つつしる」の語に対して注釈は施されないが、『花鳥余情』は「つつしるは嘸也」として、「文選大人賦」中の「嘸瓊華」の注に「嘸は食也」とあることをあげる(『漢書』司馬相如伝下引「大人賦」と顔師古注引張揖曰の誤りか)。

さて、観智院本『類聚名義抄』には「噤・小食 ツ、シル ツ、シム／ヨフ<sup>⑥</sup>」とあり、「噤」字に「つづしる」の訓がみえる。しかし本来「噤」字の訓話としては、

・小食也（『説文解字』口部）

・食也（『漢書』司馬相如伝下「噤瓊華」顔師古注引張揖曰）

・噤也（『大広益会玉篇』口部（噤・居折切。紂為象箸而箕子噤。噤、

噤也。なお「紂為象箸而箕子噤」の部分は『史記』十二諸侯年表か

らの引文。）

などがあるのので、「文章を口にてなす事」という義はない。

ここで注目したいのは、右にあげた観智院本『類聚名義抄』に「噤・ヨフ」の訓がみえること、また、鎌倉期の辞書『名語記』（二七五年）に次の記述がみえることである。

経ナトツ、シル如何。ツフ／＼セリラスノ反。ツク／＼シキ  
レルノ反同。（『名語記』卷九<sup>⑧</sup>）

ここに掲出されている「経など」つづしる」という語は、ぼつりぼつりと声に出して読む、の意かと思われる。ちなみに現代の『日本国語大辞典』（第二版<sup>⑨</sup>）には「つづしる」の語義として「時間をかけて、少しずつ食べたりしゃべったりする。ぼつりぼつりと食べたり、物を言ったりする」とある。しかし右にあげた「噤」字の訓話から考えると、「噤」字には本来「少しずつしゃべる」「ぼつりぼつり物を言う」の字義はなかったと思われる。ところが、「食べる（食也）」「噤く（噤也）」の意をもつ「噤」字の訓として「つづしる」の語が当てられたことによって、「口にてなす」という意味が拡大し、やがて「文章を口にてなす」ことをも「噤」字の

義との連なりから解する『花鳥余情』のような捉え方も生じたのではないだろうか。

『花鳥余情』の説解が妥当かどうかはさておき、こうした注解は、漢字と和語の関係を意をとめ注意深く「源語」を読み解こうとしている兼良の態度が窺える注解だといえよう。

### 三、一条兼良の方法 2——「漢」との関わりの新たな提示

#### （1）『氏族大全』の利用

一条兼良の注釈は、『河海抄』など先行の注釈が指摘する漢籍の典拠を繰り返し掲げることは省き、しかし、漢籍との間に従来指摘されなかった関係を新たに見出した場合には、それを提示していく。そして、兼良が用いる漢籍資料の中には、『源氏物語』成立後の宋代以降の新資料も積極的に活用されている。宋代以降の典籍の利用は『河海抄』など『花鳥余情』以前の『源氏物語』注釈書においても既に確認できることではあるが、兼良の注釈において利用引用されている漢籍を丁寧にとどめてみることによって、十五世紀後半の日本における漢籍受容の様相を具体的に知る一助ともなる。

まず一例として、『氏族大全』の記述を利用したとおぼしき注釈をみる。

ふでなげすてつべしや

班超投筆硯歎曰、大丈夫当立功名異域以取封侯安能久事筆硯間乎云々。

今案筆をなぐるといふこと葉はおなじ。心は物がたりにいへるにかはるべし。

『花鳥余情』第十八・梅枝

兵部卿官が持参した草子を見た源氏が、その筆の素晴らしさに「筆投げ棄つべしや（自分は筆を投げ棄ててしまいたくなる）」と言う場面。『花鳥余情』は、後漢の班超が、筆耕として雇われていた時に、大丈夫たるものがいつまでもこうした状態でいられようか、と言って筆硯を投げた、という中国の故事を引きつつ、この故事は「こと葉」は『源氏物語』に同じであっても「心」は異なる、と述べる。

こうした兼良の説解は、「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め」（『近代秀歌』）と述べた藤原定家の、いわゆる「本歌取り」に関わる議論との関係にまずは注意が必要であろうが、いまそれはさておき、『源氏物語』のコンテキストとは異なることを承知しながら、兼良がここにあってこの中国故事を引くのはなぜか。それは、『河海抄』も指摘しなかった『源氏物語』の「こと葉」と重なる記述が、漢籍から見出されたからに他なからう。当該の故事は、唐・歐陽詢等撰『芸文類聚』巻二十六・人部十・言志引「後漢書」に類同の文がみえ、また、宋・祝穆撰『事文類聚』別集・性行部・志気には「投筆封侯」の項が立てられ当該故事が載るが、『花鳥余情』の引文とは異同がある。しかし、『花鳥余情』と一致する本文は、次にあげる『氏族大全』（元代成立、編者未詳）に見出すことができる。

万里侯…班超、字仲升。有大志不修小節。備書養母。投筆硯歎曰、大丈夫当立功異域以取封侯安能久事筆硯間乎。……

『氏族大全』巻二・上平声二十七刪（班）<sup>10</sup>

『氏族大全』（新編排韻増広事類氏族大全）は、姓氏を韻によって排列し故事を列挙する事典で、日本では早くは元刊本を覆した五山版がある。<sup>11</sup>『花鳥余情』の当該注は、当時盛んに用いられるようになったこうした新たな漢籍の情報をも『源氏物語』の「研究」に積極的に取り入れようとした兼良の姿勢を反映する、典型的な一例といえる。

## （2）『通典』の利用

次に、『花鳥余情』において、漢籍の原文そのものは引用されていないが、明らかに漢籍の情報に基づいて注解が施されている箇所をみる。「若菜下」巻の冒頭、殿上の賭弓が予定の二月を過ぎても行われず、三月もまた冷泉帝の母后の「御忌月」であるため延期されるものと人々が残念に思っていた、というところである。

殿上の、り弓きさらぎと有しもすぎて三月はた御き月なれば  
くちおしと人々おもふに

殿上の、り弓三月の例もあれば故ふちつばのきさらぎの御忌月によりて停止せられたるといへり。忌月の名は唐朝よりはじまる。《A》但晋穆帝后を納んとして九月九日これ忌月也いかゞとありしを礼記に忌日の詞ありて忌月の文なし忌月あらば忌歳あるべしといふ儀あり。《B》又唐武后の時契丹を平て軍をかへす時凱旋の楽をなさんとせしそれも高帝の忌月いかゞといふ儀ありしを晋穆帝の例を引てつゝに軍をおこす事をえたり。本朝にはなを忌月をさる事に

なれり。九月九日の宴も延喜帝の御忌月にあたるによりて十月に是をおこなはれて残菊宴となづけられたり後江相公其文をかきたり。文粹に見えたり。

〔花鳥余情〕第廿・若菜下

『河海抄』は当該部分の注釈として、『西宮抄』と『李部王記』という和書のみを引いて賭弓や忌月のことを説くが、『花鳥余情』は「忌月の名は唐朝よりはじまる」として《A》晋穆帝と《B》唐武后の時の二例を新たにあげる。

この二例は、唐・杜佑の『通典』に一括して取りあげられるものである。兼良がここで参照しているのは『通典』であり、それを和文に抄訳して注釈に用いているのである。

忌日議子卯日附 周、漢、大唐

……大唐武太后天冊万歳中、建安王攸宜平契丹迴、欲以十月入城、時以為凱旋、合有樂、既属先帝忌月、請備而不奏。王方慶議曰、按礼經但有忌日而無忌月。若有忌月、即有忌時、忌歳、益無理撓。具音楽篇

納后值忌月議 晋

晋穆帝納后值忌月、范汪与王彪之書云、尋起居注、九月是康皇帝忌月。礼止云忌日不樂、都無忌月語、不審是疑不。若当疑於九月、建八月其間当下六礼、便為至逼、不復展、如此当伸至十月。忌不応以為忌邪。足下可以示曹諸賢取定也。博士曹耽為不見礼有忌月、学浅、不敢以所見、便言無之。博士荀訥按、礼唯云忌日不樂、無忌月之文。所謂忌日、当是子卯。今代所忌、更以周年日数、此似乎古不同。王洽

曰、若有忌月、当復有忌時、忌歳。輒共視礼無忌月、今者所撓、正当以礼經為明。僕射周閔等云、礼止有忌日不樂、了無忌月語。王者当仗經典、存遠体、君奉必書、動為代法。故当如皇太后令旨、剋此九月、宜以為定。

〔通典〕卷一百・礼六十・沿革六十・凶礼二十二

『通典』は、すでに『河海抄』(卷十五・「御法」卷)においても書名とともに引用が確認できるものではあるが、いまは、『忌月』の事例として『通典』所載の記事が簡便簡潔に用いられていること、また、日本における『通典』の利用例として、その本文が和文に置き換えられた形で残されていることに注意したい。

なお兼良は最後に、「本朝」で「忌月」が行われていた例として、『本朝文粹』卷二所収の大江朝綱の文をあげる(「停九日宴十月行詔」)。「花鳥余情」にはこの他にも、『源氏物語』の内容や表現に関わる『本朝文粹』の文を取りあげる箇所が複数あることも注意しておきたい。その中には『河海抄』には指摘がないものもあり、それらはまた『花鳥余情』が新たに意識して取りあげた『源氏物語』と漢文世界とのつながりといえる。

#### 四、一条兼良の方法 3 ― 杜甫詩、蘇東坡詩と詩注、詩話の利用

##### (1) 杜甫詩による注釈

『花鳥余情』には、『河海抄』と同様、杜甫詩や蘇東坡詩を注釈に引く場合がしばしばある。『河海抄』における杜甫詩とその注の引用は『集千家註分類杜工部詩』(徐居仁編、黄希・黄鶴補 一二

一六年刊、蘇東坡詩とその注の引用は『王状元集註分類東坡先生詩』(王十朋(一一二七)編)等に拠るものと思われる。つまり、これらもまた南宋に成立した、『源氏物語』以後の時代の新たなテキストを利用した注釈なのであるが、それでは『花鳥余情』において杜甫詩や蘇東坡詩は、『源氏物語』の注釈としていかなる意義を有するものとして用いられているのか。まず、杜甫詩を用いる注釈からみる。

わかれといふものかなしからぬはなし

杜子美も死別已吞声生別常惻々詩につくれり。生死とも  
に別はかなしきものなり。  
(『花鳥余情』第三・夕顔)

けしきばみほ、ゑみわたれるを

ほ、ゑむは笑也。梅のやうくひらけたるをいふ。索笑梅  
と杜子美も詩につくれり。  
(『花鳥余情』第四・末摘花)

前者は、夕顔との死別を悲しむ右近への光源氏の慰めの言葉に  
対して、杜甫の「夢李白(李白を夢む)」詩の句を引き、死別であ  
れ生き別れであれ別れとはいずれも悲しいものだ、という表現が  
漢詩にもあることを示す。また後者は、梅がほころぶ様子を「ほ  
ほゑみ」と表現した『源氏物語』に対して、類似の表現として杜  
甫の「舍弟觀赴藍田取妻子到江陵喜寄(舍弟觀藍田に赴き妻子を取  
り江陵に到ると喜びて寄す)」詩に「巡簷索共梅花笑(簷を巡り梅花と  
共に笑はんことを索むれば)」があることを示すものと思われる。

『源氏物語』の本文に対して「——と詩につくれり」という体  
例で漢詩を引き並べる注釈は『河海抄』にも散見されるが、これ  
は邇れば院政期以降の歌学書の方法を引き継ぐものと考えられ

る。こうした注釈は、『源氏物語』の表現と漢詩の表現との重なり、和漢の表現の広がりや連なりを意識、指摘するものといえる。同様の例をもう一つあげる。

池の水どりどものはねうちかはしつ、

水どりもさえずるは春の心ある也。又鴛鴦は雌雄はなれぬ  
とり也。「がしぬればいまもやがてしぬといへり。杜子

美詩にも鴛鴦不独宿とつくれり。うばそくの宮北のかたに  
はなれ給て水鳥のつがひはなれぬをうらやましく見給ふ  
也。  
(『花鳥余情』第廿五・橋姫)

妻を亡くした八の宮が水鳥のつがいを見て羨む場面。『花鳥余  
情』が引く「鴛鴦不独宿(鴛鴦独りでは宿せず)」は杜甫「佳人」  
詩の一句である。なお、杜甫詩に先立って紹介される、鴛鴦は雌  
雄のどちらかが死ねば残された方も死んでしまうという記述(波  
線部)は、つとに知られていた中国故事で、例えば『和名類聚抄』  
羽族部にも「崔豹古今注」を典拠としてみえるものである。その  
うえで兼良がここに杜甫詩を引くのは、この故事をふまえた表現  
が杜甫詩にも見出せるのだ、という「発見」を伝えるものではない  
だろうか。ちなみに、『集千家註分類杜工部詩』および南北朝  
末期以降特に重視されるようになったとされる『集千家註批点杜  
工部詩集』(劉辰翁批点、高崇蘭編、元大徳七(一一三〇三)年原刻<sup>15)</sup>)の  
当該詩注のいずれにもその「古今注」が引かれている。

……趙曰、崔豹古今注曰、鴛鴦鳬類也。雌雄未嘗相離、人得  
其一、一思而死。故謂之匹鳥。

(『集千家註批点杜工部詩集』卷五「佳人」詩注<sup>16)</sup>)

仲睦まじい水鳥のつがいについての日本でもよく知られた故事に基づく表現が、杜甫詩にも存在し、当時よく読まれた宋元の杜詩附注本の詩注もそれを指摘しているのであった。兼良の注釈は、『源氏物語』の表現がこのように「漢」の世界にも通じる広がり、奥深さを含むものであることを見出し、説こうとしたものと考えられるのである。

また、『花鳥余情』には、次のような杜甫詩の引用もある。

いきをのべてぞかなしき事もおぼえ給ける

あまりにあされたる事には中々かなしさもおぼえぬ也。ち

と心をとりしづむる時になみだをながす物也。杜子美詩に

驚定初拭涙とつくれるは此心也。〔花鳥余情〕第三・夕顔

いとゞかゝる事にはなみだもいづちかいにけん

杜詩云驚定却拭涙云々。あまりあされたる事には中々涙

はおちぬ物也。心をとりしづめ思わく時になしさはおほ

えてながるゝ物也。杜子美詩も其心をつゞれる也。

〔花鳥余情〕第廿五・椎本

前者は「夕顔」巻で、夕顔に先立たれた源氏が、惟光の顔を見て「息をのべ（緊張がとけ）」たとたん、悲しみを思い出して涙する、という場面。後者は「椎本」巻で、八の宮臨終の知らせが伝わり、姫君たちは悲しみの余り「涙もいづちか」にいつてしまつたかのである、という場面。右の二箇所注解において『花鳥余情』が引くのは、杜甫の「羌村」詩の一句、長く離ればなれになつていた杜甫に再会した家族が、はじめはただ驚くばかりであつたのが、落ち着きを取り戻すと今度は涙をこぼす、という詩

句である。

羌村三首 其一 杜甫<sup>①7</sup>

崢嶸赤雲西 日脚下平地 崢嶸<sup>さうわう</sup>たる赤雲の西 日脚平地に

下る

柴門鳥雀噪 歸客千里至 柴門鳥雀噪ぐ 歸客千里より至

る

妻孥怪我在 驚定還拭淚 妻孥我が在るを怪しみ 驚くこ

と定まりて還た涙を拭ふ

世乱遭飢饉 生還偶然遂 世乱れて飢饉に遭へり 生還偶

然に遂げたり

隣人滿牆頭 感歎亦歔歎 隣人牆頭に満つ 感歎して亦歔

歎す

夜闌更秉燭 相對如夢寐 夜闌にして更に燭を秉る 相對

すれば夢寐の如し

恋人や家族との死別に際して、悲しみの余り涙も流れない、あるいは、気持ちちがゆるんだとたんに涙があふれる、という『源氏物語』の内容に対して、兼良は、この杜甫詩も「此心也」「其心をつゞれる也」とし、両者は「心」が通じるものだとのコメントを加える。

「心」あるいは「ことば」をキーワードとして作品を検討していくことは、これもまた歌学書をはじめ日本の古典学に通通の方法であるが、『花鳥余情』においても、『源氏物語』の「心」と「ことば」について考察し、それを他の作品や典籍との関係にひらいて捉えていくこうとする態度が顕著に感じられる。なお『花鳥余情』



が用いる「心」と「ことば」、とりわけ「心」の語の含意は複雑で必ずしも一様ではなく、歌学との相互関係についても慎重に考慮しなければならないが、右のような注解においては、兼良によつて『源氏物語』と杜甫詩との文学的表現方法や発想の連関が見出されたことにより、『源氏物語』が、杜甫詩に並ぶという意味でも、いっそう価値ある「日本の古典」として当時の読み手に披露されることになったのではないかと想像される。

最後にもう一例、『花鳥余情』が杜甫詩との関係に触れる箇所をみる。

まじなひかぢなど

まじなひは厭術也。さま／＼の事どもあり。杜子美詩の手提髑髏血といふ句を誦しても瘡はおつるといへり。加持は

真言教の陀羅尼のちからなり。

〔花鳥余情〕第四・若紫

〔若紫〕巻の冒頭、「わらはやみ」を思つた源氏が「まじなひかぢ」などの効果なく北山を訪れる場面である。ここで『花鳥余情』は、杜甫の「手提髑髏血」という句を誦すれば瘡が治る、という伝説的記事を載せる。「手提髑髏血といふ句」とは、『源氏物語湖月抄』が指摘するように、以下の杜甫詩を指すものであろう。

是杜子美花郷歌云、子璋髑髏血模糊、手提擲還崔大夫といふ句也。

〔源氏物語湖月抄〕若紫

しかし兼良が依拠したのは、この杜甫詩のものではなかったのではないかと思われる。

杜少陵因見病瘡物、謂之曰、誦吾詩可瘳。病者曰、何。杜曰、夜闌更秉燭、相對如夢寐之句。瘡猶是也、又曰、誦吾手提髑

髏血模糊。其人如其言誦之、果愈。言感鬼神亦不妄。古今詩話

〔詩話総龜〕卷四十八・奇怪門

右にあげたのは、宋代の詩話『詩話総龜』（北宋・阮閱編）が『古今詩話』から引く一話である。ここで兼良が注釈に利用しているのは、宋代以降特に盛んに編まれたこうした詩話の類であることは間違いないであろう。ただしさらに留意すべきは、当該の故事が、南北朝以降盛んに用いられるようになった、元・陰時夫編、陰中夫注になる韻書『韻府群玉』（卷十九・入声・十葉・瘡）にも引かれていることである。兼良が当該故事の情報を入手するためのテキストは複数存在したわけであり、あるいはまた、当時盛んに杜甫研究を行っていた禪僧らとこうした情報が共有されていたのかもしれない。兼良の具体的な情報源をいま特定することはできないが、いずれにせよ、『花鳥余情』の当該注に利用されたのは、宋代以降の新たなテキストが伝える、新たな情報だったのである。そしてこれら新時代の詩話類等の利用は、次にあげる蘇東坡詩に関わる引用においても同様に確認できるものである。

## （2）蘇東坡詩による注釈

それでは次に、蘇東坡詩をひく注釈についてみる。

ぞくひじりとかこのわかき人々つけたなる

東坡山谷などもみづから有髮僧在家僧など詩にもつくれり。

〔花鳥余情〕第廿五・橋姫

これは、先にみた杜甫詩を引く注釈と同様、「詩にもつくれり」という体例によるものである。ここで『花鳥余情』が「ぞくひじり」の語に対応する詩語としてあげる「在家僧」は蘇東坡「和黃

魯直食筍次韻（黃魯直筍を食すに和して次韻す）<sup>(23)</sup>や黃庭堅「謝楊履道送銀茄（楊履道が銀茄を送るを謝す）」等にも見える。また「有髮僧」の語は詩には確認できないが、黃庭堅「写真自贊」に「似僧有髮」という表現がある。膨大な数の蘇東坡詩、黃庭堅詩から、この詩語をいかにして取り出し得たのか。兼良の『尺素往来』には、參照学習すべき書物として「杜子美、李太白、東坡、山谷」等、当時盛行していた唐宋の詩文集が掲げられている。右の注釈は、蘇東坡や黃庭堅詩を基本的知識として徹底して学ぼうとした当時の環境を反映するものといえる。

引き続き、他の例もみよう。

つや、かにかひはいて

貧家淨掃地といふ心なり。東坡詩にあり。

はるの光をこめ給へる大とのなれど

〔花鳥余情〕第九・蓬生

藏春塢或藏春閣などいへるこゝろなり。

〔花鳥余情〕第十三・胡蝶

前者は「蓬生」巻で、末摘花の住む荒れ果てた邸を「つや、かにかひは」く人もいない、という箇所。また後者の「胡蝶」巻は、あでやかな六条院の様子を述べる箇所。ここで兼良がこれらに「心」（趣向）が通じるものとして引く「貧家淨掃地」と「藏春塢」は、蘇東坡詩の詩題であるが、いま注意したいのは、「藏春閣」は詩語や詩題ではなく、蘇東坡作の詞「浣溪沙」に付された題（徐州藏春閣園中）<sup>(24)</sup>にみえる語であることである。蘇東坡の詞が、当時いかなるテキストで読まれていたのか、また詩題と詞の題を

並べる当該の注釈が兼良の「発見」によるものかなど、詳細は不明であるが、いずれにせよ、兼良当時の宋詩・宋詞受容の一例として興味深いものである。

次に、蘇東坡詩の注あるいは詩話を利用したとおぼしき注釈についてみる。

筆とるみちと暮うつ事こそ

暮は東坡も三不能の一にいへる事也。

〔花鳥余情〕第十・総合

「総合」巻で帥宮が書画と暮の道というものは魂（天分）があらわれるものだ、と語る場面。『花鳥余情』が注釈に載せる「暮は東坡も三不能の一にいへる」ということに関連して、蘇東坡の「次韻錢穆父会飲（錢穆父が会飲に次韻す）」詩には「我飲如奕碁（我が飲むこと奕碁の如し）」の一句がある。そして『王状元集註分類東坡先生詩』巻十一の当該詩句の注には、

世有作詩如奕碁。奕碁如飲酒。飲酒乃戒之語、僕此二事皆不能。

居仁・逖齋閑覽云、子瞻嘗自言平生三不如人、謂著碁喫酒唱曲也。<sup>(25)</sup>

とみえる。この詩注には「三不能」という語はみえないが、『花鳥余情』が注釈に引く「三不能」の語は、『逖齋閑覽』が語る記事（子瞻（蘇東坡）は碁と酒と唱歌曲においては他人に及ばないと常々言っていた）に基づくものと考えて間違いないだろう。

宋・范正敏撰『逖齋閑覽』は佚書であるが、その記事は、さきに取りあげた『詩話総龜』など詩話の書にも採られている。兼良

は、蘇東坡詩注、あるいは詩話の類からこのエピソードを知り、「甚」というものが努力ではどうにもならず、人の天分によるものだ、という『源氏物語』のこの場面に添えたのであろう。

このように、蘇東坡詩がそれにまつわる故事とともに注釈に引かれる例をもう一つみる。

あふぎばかりをしるしとにやとりかへていで給ふ

和泉式部仮名記かへる人のあふぎをとりかへてとかけり。

又東坡詩云換扇惟逢春夢婆とつくれり。春夢婆は女の異名也。唐土には夫婦の約をなすしるしには扇をとりかふる事ある也。

『花鳥余情』第五・花宴

朧月夜との逢瀬の後、扇を逢瀬のしるしとして取り換えて源氏が立ち去っていく場面。この箇所の注解として「和泉式部仮名記」を引くことは『光源氏物語抄』に既に見えるものであるが、兼良がここに加えるのは蘇東坡の「被酒独行偏至子雲威徽先覺四黎之舍（被酒して独り行きて偏く子雲・威・徽・先覺の四黎の舍に至る）」詩の一句である。そして、それに続く波線部の内容は、次にあげる『四河入海』の当該詩に対する抄と重なる。

換扇 芳云、方輿勝覽賓州図経云、……男女未昏嫁者、以歌詩相応和、自配配偶、各以所執扇帕相博、謂之博扇。……

春夢婆 芳云、趙德麟侯鯖錄、東坡在昌化、常負大瓢行歌田畝間。蓋哨遍也。續婦年七十、謂曰、内翰昔日富貴、一場春夢。坡然之。里人因呼為春夢婆。……

一云、……換扇ト云ハ、夫婦相約スル時ニスル事ソ。

〔四河入海〕十七之二<sup>(28)</sup>

『四河入海』（一五三四年）は、笑雲清三が蘇東坡詩に対する四者の注を集め、さらに自説を加えて編纂したもので、右の「芳云」は大岳周崇（一三四五―一四二三年）の『翰苑遺芳』、「一云」は一韓智翹が桃源瑞仙（一四三〇―八九九年）の講義を記した『蕉雨余滴』からの引用である。『翰苑遺芳』は、宋・祝穆撰『方輿勝覽』から配偶者を選ぶ際に扇で打ち合うという中国の習俗を紹介し、また宋・趙令時撰『侯鯖錄』から、蘇東坡に対して「内翰昔日の富貴、一場の春夢」と言った老婆を里人が「春夢婆」と呼んだ、という逸話を引く。また『蕉雨余滴』は、「換扇」が婚約の時に行われるものである、と説く。

つまり、当時日本では、蘇東坡の詩に関連して、宋の地方志や札記類等、日本に新たに伝来していたさまざまな資料を用いて詳細な注釈が重ねられていたのであり、『花鳥余情』の当該注の記述も、そうした環境の中から生み出されたものと考えられるのである。

## 五、終わりに——『花鳥余情』にみる和漢の語文世界への関心と探究

以上のように『花鳥余情』は、『河海抄』が言及することのなかった「漢」との関係を発掘し、また『源氏物語』よりも後の代に書かれた詩文や新来のテキストの内容をも『源氏物語』の表現世界に関連させ、『源氏物語』のことはや心を説こうとするものであった。

なお、『花鳥余情』の中には、注釈において後代の資料を用い

ることに対する次のようなコメントがみえる。

さくらをかけ物にて三はんにかずひとつち給はんかたに

宋朝に王荊公といふ人鍾山にありて藥秀才と碁をかこむ。

梅詩一首をもて賭とす。秀才まけて不能作詩。王荊公代てつくれる事あり。<sup>(29)</sup>後代の事なれど花を賭にする事あひにたるにや。  
〔『花鳥余情』第廿四・竹河〕

ここで兼良は、これらが「後代の事」であることを承知の上で注釈に引くのだと述べている。兼良は、『源氏物語』の文章世界に時空を超えた広がりや普遍性を見出し、また、兼良の時代の人びとにむけて『源氏物語』を読み学ぶための最新の切り口や視点発信すべく、後代の資料をも意図的に用いたようである。

しかし一方、『花鳥余情』には次のようなことばもみえる。

うきにまぎれぬ恋しさの

恋しさのうきにまぎるゝ物ならば又二たびと君をみましや

大貳三位<sup>(30)</sup>

物がたりより後の歌也。不可為証歌也。

〔『花鳥余情』第廿・若菜下〕

ここでは兼良は、『源氏物語』本文「うきにまぎれぬ恋しさの」に重なる大貳三位の和歌を引きつつも、「物がたりより後の歌」であるから「証歌」とはできない、と述べる。

兼良はしばしば、『源氏物語』の表現の基となった和歌を求め、<sup>(31)</sup>「歌の詞あるべし、可尋之」(「末摘花」巻)、あるいは「古歌の詞あるべし、たづぬべし」(「紅葉賀」巻)と述べる。ところが同時に、兼良は、後代の藤原定家や藤原家隆らが『源氏物語』や

『源氏物語』が基づいた詩を詠んだ和歌をも『花鳥余情』に載せている。

えいのかなしみみだそ、く春のさかづきのうちと

白楽天が江州へ左遷せられし時三月卅日に夷陵といふ所にとまりて元微之にわかれし時つくれる詩の句也。それをいま三位の中將に源氏のわかれ給ふ時に思なずらへてもろ声にうちずし給ふなり。此詩のこゝろを定家卿韻の歌によりみ給へり。

もろ共にめぐりあひける旅枕涙ぞそ、く春のさか月

〔『花鳥余情』第八・須磨〕

「えいのかなしみ……」は、謫所にあつた白居易が元稹と行き会い作つた詩の一句(「醉悲灑淚春盃裏」<sup>(32)</sup>)。ここは、須磨を訪れた三位中將と源氏が、声を合わせてこの白詩を誦ずるという場面である。

そして兼良は、この「詩のこゝろ」を詠んだ歌として定家の和歌をもひく。これは、白詩が、源氏物語の登場人物によって(訓読して)口ずさまれ、一方その詩の心を定家は和歌に詠む、という漢詩と和歌の交錯、そしてまた、古代の日本のことばと表現が有する重層性に対する、兼良の関心と問題意識を示す注釈だといえないだろうか。

また、兼良が、「漢」と『源氏物語』との関わりにおいて、その「ことば」と「心」に言及する箇所として、次のような例もある。これは、『奥入』以来、つとに『遊仙窟』をふまえた表現であることが指摘されてきた「蜻蛉」巻の一節に対しての発言であ

る。

などねたましがほにかきならし給ふとの給ふに

遊仙窟に女のことひくをき、ていへる也。

にるべきこのかみやはべるべきと

これも遊仙窟の詞也。一品宮は女二宮の御このかみ也

……。

まろこそおほんは、かたのおぢなれと

是も遊仙窟の心をとりにかけり。かほる大將は明石の中宮の御弟なれば一品宮には母かたのおぢにあたる也。

（『花鳥余情』第廿九・蜻蛉）

琴の爪音を耳にした薫が中将のおもとと会話を交わす場面。

『花鳥余情』は、『源氏物語』当該場面の典拠として古注釈が既に指摘してきた『遊仙窟』の本文を改めて出すことはしない。兼良が加えるのは、ここに『遊仙窟』の「詞」と「心」がとられていること、すなわち、『源氏物語』の「詞」と「心」、物語の表現や発想、趣向がいかにして生みだされ紡がれてきたものか、という観点からの説解である。

また兼良は、『河海抄』をはじめとする先行の注釈が『源氏物語』の「詞」や「心」にそぐうものではないと判断した場合には、きつぱりと先人の釈を否定する。

人のいみじくおしむ人をば帝釈天も返し給ふ也

梵天帝尺は人間をつかさどる天也。帝尺は初利天の主也。

或抄に宇治大納言物語に浄蔵貴所が父善相卿のうせたるをいのりいかしたる事のあるをひけり。又河海には宋玉が為

屈原招魂詞をつくれる事をいへり。いづれもこ、の詞にか

なはず。別に帝尺の人の死せるを返したる本縁あるべし。

かさねてたづねしるすべし。

（『花鳥余情』第廿九・蜻蛉）

浮舟の入水を知った乳母が、「せめて亡骸だけでも返してほしい」という場面。『河海抄』はここで実は蘇東坡の「澄邁駅通潮閣」詩の句と、『王狀元集註分類東坡先生詩』における当該詩の注に載る『楚辭』招魂等を注釈に引いていたのであるが、兼良はそれはここには当たらないとし、さらに別の「本縁」を尋ねるべきだ、と述べるのである。

このように兼良は、『源氏物語』の「ことば」の由来を求め、その「心」を追究していくとともに、『源氏物語』を基点として、時代を超えた和漢のことばの世界の広がり、連なりを探究していく。これは、日本の語文が漢語、漢文との深い関わりの中で形成されてきたこと、また、『源氏物語』という作品が、そうした和と漢の絡まり合う語文世界を考察するには格好のテキストであり、研究に値する「かさざま」「つくりざま」を備えた「古典」であったということに起因しよう。兼良がみせるこうした注釈の方法は、日本の「古典学」のありようの重要な一面を伝えるものといえる。

また本稿では、『花鳥余情』には宋代以降に成立した新しい時代の漢籍を用いた注釈が存することをみた。兼良の時代は、遣明使の往来や五山僧の活動、宋学の盛行や多数の漢籍抄の作成等、日本の「中国学」が大きく展開していく時期でもあった。なお『花

鳥余情」の注釈の方法や内容は、歌学との関係、あるいは和歌や連歌、漢詩や聯句の創作状況など文学、文芸に関わる当時の具体的環境との関わりからもさらに深く考究すべきである。が、ともあれ、和漢の古典籍双方に通じた兼良によって生み出された『花鳥余情』には、兼良の学問が遺憾なく発揮され、またその時代の知的関心の方向性が随所に反映されている。『花鳥余情』は、『源氏物語』の魅力と意義はもちろん、十五世紀という時代の日本の学術文化の特質と達成がいかなるものであったのか、さまざまなメッセージを伝えてくれているのである。

- 注(1) 河野貴美子「古注釈からみる源氏物語と唐代伝奇」(日向一雅編『源氏物語と唐代伝奇』『遊仙窟』『鶯鷺伝』ほか)青簡舎、二〇一二年二月)①、同「古注釈書を通してみる『源氏物語』の和漢世界——『河海抄』、『花鳥余情』——」(中野幸一編『平安文学の交響——享受・摂取・翻訳——』勉誠出版、二〇一二年五月)②、同「和語と漢語が紡ぐ文——古注釈を通してみる『源氏物語』と『白氏文集』——」(仁平道明編『源氏物語と白氏文集』新典社、二〇一二年五月)③、同「『源氏物語』と漢語、漢詩、漢籍——『河海抄』が読み解く『源氏物語』のことばと心——」(日向一雅編『源氏物語 注釈史の世界』青簡舎、二〇一四年二月)④等参照。本稿はこれらに続くものである。
- (2) 例えば本居宣長『源氏物語玉の小櫛』一の巻・註釈は『河海抄』と『花鳥余情』について「此二つの抄は、かならず見ではかなはぬもの也」と述べる。
- (3) 『花鳥余情』と『河海抄』、歌学との関係については、武井和人「一条兼良の書誌的研究 増訂版」第一章第三節、第三章第二節(おうふう、二〇〇〇年十一月)等参照。また一条兼良の注釈の方法や目

的については、前田雅之「和語を和語で解釈すること——一条兼良における注釈の革新と古典的公共圏」(『文学』九一三、二〇〇八年五月)、同「『源氏物語』はどのように注釈されたか——『花鳥余情』の力学——」(陣野英則・新美哲彦・横溝博編『平安文学の古注釈と受容』第二集、二〇〇九年九月)、同「『花鳥余情』——兼良の源氏学——リアリティーを担保する可視的存在——」(前田雅之編『中世の学芸と古典注釈』竹林舎、二〇一一年九月)等の一連の論考においてその意義や革新性が論じられている。

- (4) 『花鳥余情』の本文は中野幸一編『源氏物語古注釈叢刊第二巻 花鳥余情 源氏和秘抄 源氏物語之内不審条々 源語秘訣 口伝抄』(武蔵野書院、一九七八年十二月初版)に拠り、適宜句点等を加えた。
- 注(4) 前掲書解題等参照。
- (5) 正宗敦夫校訂『類聚名義抄』(風間書房、一九六八年六月)参照。
- (6) 宗福邦・陳世鏡・蕭海波主編『故訓匯纂』(商務印書館、二〇〇三年七月)参照。
- (7) 田山方南校閲、北野克亨「名語記」(勉誠社、一九八三年一月)参照。
- (8) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典 第二版』第九卷(小学館、二〇〇一年九月)参照。
- (9) 全国高校古籍整理研究工作委員会編『日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍影印叢書』第一輯(線装書局、二〇〇一年十二月)参照。
- (10) 住吉朋彦『中世日本漢学の基礎研究 韻類編』序説二、第三章(汲古書院、二〇一二年二月)参照。
- (11) 王文錦他点校『通典』(中華書局、一九八八年十二月)参照。
- (12) 『夕顔』巻、「若紫」巻、「賢木」巻、「松風」巻。
- (13) 注(1) 前掲河野貴美子論文④参照。
- (14) 太田亨「日本禅林における中国の杜詩注釈書受容——『集千家註分類杜工部詩』から『集千家註批点杜工部詩集』へ——」(『日本中国学会報』五五、二〇〇三年十月)等参照。
- (15) 『集千家註批点杜工部詩集』の引用は『天理図書館善本叢書漢籍

之部第三卷 集千家註批点杜工部詩集』上（八木書店、一九八一年一月）に拠る。なお『集千家註分類杜工部詩』（国会図書館蔵五山版、一三七六年刊）における「古今注」引文も異同はない。

(17) 鈴木虎雄訳注『杜詩』第二冊（岩波書店、一九六三年五月）参照。なお当該詩句（「驚定還拭淚」）の「還」字の「花鳥余情」の引用における異同については後考を俟つ。

(18) 『源氏物語』古注釈書と歌学書の関係については、乾善彦「漢字による日本語書記の史的研究」第三部第五章（塙書房、二〇〇三年一月）、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫監修『古今集注釈書影印叢刊3 古今集素伝懐中抄』浅田徹「解題」（勉誠出版、二〇一〇年十月）、松本大「『河海抄』における歌学書引用の実態と方法」顕昭の科学を中心に（『詞林』五〇、二〇一一年十月）、同「『河海抄』巻九論―諸本系統の検討と注記増補の特徴―」（『中古文学』九一、二〇一三年五月）等参照。

(19) 『北村季吟古註釈集成8 源氏物語湖月鈔 二』（新典社、一九九七年八月）参照。

(20) 阮閱編、周本淳校点『詩話総亀』前集（人民文学出版社、一九八七年八月）参照。

(21) 小川剛生氏は「南北朝期の源氏物語研究―四辻善成を中心に」（第五十八回国際東方学者会議発表資料、二〇一三年五月二十四日）で、『河海抄』において早く『詩話総亀』を利用したと思われる注解があることを指摘されている。

(22) 『韻府群玉』の中世日本における受容については注(11)前掲住吉朋彦書参照。

(23) 注(3)前掲前田雅之論文（二〇一一）には「花鳥余情」における蘇東坡の詩句の引用は「典拠論」を「超克」するものとする言及がある。なお『河海抄』や『花鳥余情』における蘇東坡詩の引用については松本大「典拠から逸脱する注釈―中世源氏学的一端―」（平成二十六年度中文学会秋季大会シンポジウム、二〇一四年十月十一日）でも取りあげられている。

(24) 『群書類従』第九輯参照。

(25) なお『四河入海』の「和黃魯直食筴次韻」詩の抄には「復齋漫録」の記事として黃庭堅の「自贊」が引用されている（万里集九説）。『四河入海』については後述。

(26) 毛晋汲古閣家塾刊本『宋六十名家詞』所収『東坡詞』。なお元延祐刊『東坡樂府』等には当該題を缺く。張志烈等主編『蘇軾全集校注』（河北人民出版社、二〇一〇年六月等）参照。

(27) 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成』第十二輯（汲古書院、一九七五年九月）参照。

(28) 引用は中田祝夫編、抄物大系『四河入海』8（勉誠社、一九七一年十一月）に拠る。また中田祝夫「四河入海解説」（同12、一九七二年六月）も参照。

(29) ここに引用される王荊公（王安石）の故事は『王文公文集』李壁注引呉曾『能改齋漫録』等に見える。注1前掲河野貴美子論文②参照。

(30) 『後拾遺和歌集』卷十四・恋四・七九二。なお、当該の注については、松本大「花鳥余情」『伊勢物語愚見抄』の後人詠注記―歌学から物語注釈への一過程―（『詞林』五二、二〇一二年十月）も参照。

(31) 『白氏文集』卷十七「一〇七」「十年三月三十日、別微之於漚上、十四年三月十一日夜、遇微之於峡中、停舟夷陵、三宿而別、言不尽者、以詩終之、因賦七言十七韻以贈 且欲寄所遇之地与相見之時、为他年會話張本也」。

(32) 『拾遺愚草』中・韻歌百廿八首・旅・一六二六。

(33) 注(1)前掲河野貴美子論文④参照。

【附記】 本稿は第五十八回国際東方学者会議（ICES）東京会議・シンポジウムⅢ「源氏学」という学問―古注釈の方法と古記録・漢籍・仏典・古典学の書（二〇一三年五月二十四日）における口頭発表（『源氏物語』と漢語、漢文、漢籍―古注釈が読み解く『源

『氏物語』のことばと心』の一部に基づき、補筆修正を加えたものである。成稿にあたり貴重なご意見をいただいた方がたに感謝

申し上げます。

## 新刊紹介

渡辺秀夫著

### 『和歌の詩学』

—平安朝文学と漢文世界—

副題の「平安朝文学と漢文世界」は、著者の一冊目の論文集のタイトルである。

『古今和歌集』を中心とした平安朝文学と漢文学とのかかわりを論じた前著を引き受けて、本書では、第一部は「和歌の詩学」と題し、和歌の表現や思想と漢文世界との関わりを論じている。第二部では、物語や願文といった散文作品と漢文世界との結びつきに言及する。十世紀の和漢比較研究には必携の一著である。

また、巻末に中文要旨と英文要旨を付けており、日本において比較研究を公開する

だけではなく、世界に開かれた研究となっている。

(二〇一四年六月 勉誠出版 A5判 五四四頁 本体一三〇〇円)〔荒井洋樹〕

森朝男著

### 『読みなおす日本の原風景』

—古典文学史と自然—

「自然は人間の想像力の起源であり、自然によって人は夢見る力を与えられることになったのである。したがってそれは文学意識の形成にも関係している。」(第二章まとめより)

今日の社会はさまざまな面において、自然との関係を考えなければならぬ状況に直面している。そして、日本の文学はその成立から、自然との関わりと密接な関係を

持っているのである。本書は、古代から江戸末に至るまでの文学と、その自然との関わりを追うことにより、伝統的な日本の自然観を鍛えなおすことを目的とした一冊である。

神話・物語・和歌・俳諧から仏教書や芸道書に至るまでの、多岐にわたる分野の作品から例を採り、自然観の基盤、文学意識の形成における自然の影響、各時代の文学と自然との関わりを丁寧に考察している。それぞれの作品の引用には、著者による明快な現代語訳が付されており、誰が読んでもわかりやすく、興味を抱きやすい内容となっている。

(二〇一四年一〇月 塙書房 新書判 二〇七頁 本体一三〇〇円)〔木田博子〕